

時代であったにも関わらず、宮廷歌人の現代和歌は幕末までついに出版されることはなかった。出版されたのは、もっぱら古典和歌か地下歌人の和歌か没後しばらく経つてからの宮廷歌人の和歌のみである。宮廷歌会で詠出された最新の宮廷歌人の和歌を詠むためには、「コネを使つて、宮廷歌会の記録を筆写した写本を手に入れるしかなかった。そんな、庶民があこがれた宮廷歌会の晴の歌の記録の中から、国立国会図書館に所蔵されている、まだ活字化されていない『内院和歌御会』（分類番号893-177）や『内裏和歌御会』（同124-202）の中からいくつか紹介してみたいと思う。先に挙げた小沢蘆庵が活躍する十八世紀後半から十九世紀の和歌に注目し、特に、宮廷歌会の中心であり、現在のところ譲位した最後の天皇である光格天皇や、最後の女帝である後桜町院の歌などを紹介してみたい。

天明二（一七八二）年一月二十四日

和歌御会始 貴賤迎春

- ・へだてなくたかきいやしき初春はつはるにむかふ
- こゝろはのどけかるらし（光格天皇）
- ・君が恵かゝれとぞおもふ民の戸ものどけ
- さもれぬはるのひかりに（後桜町院）

光格天皇は、この時十二歳。後桃園天皇の突

然の崩御のために跡を継ぐこととなり、閑院宮から御所に上がって安永八（一七七九）年十一月に踐祚せんそ、翌年十二月に即位し二年目の正月を迎えたばかりである。出題者は冷泉為章で題は「貴賤迎春」、身分の高い者も低い者も等しく春を迎えるという意であろう。光格天皇の歌には、おおらかな心で等しく民を見守る天皇としての心がよくあらわれている。宮廷行事の最初である和歌御会始で、新春を迎えるにふさわしい王者の風格の漂う歌を詠出している。後桜町院は、崩御した後桃園天皇の伯母にあたる方で、光格天皇に熱心に歌道教育を授けたひとりである。民の家々にゆきわたる新春の光のように光格天皇のめぐみが国民の隅々にまでゆきわたりますようにという祈りにも似た思いがにじむ歌である。公の存在として詠まれた晴の歌である。

文化十四（一八一七）年一月二十四日

和歌御会始 毎年愛花

- ・ゆたかなる世の春しめて三十年あまり九重のはなをあかずみし哉（光格天皇）
- ・見ても猶あかずみはしのさくら花いくよ
- のとしの春をちぎりに（中宮）

光格天皇が譲位する直前の、天皇として最後の御会始で詠まれた歌である。この時

四十七歳。「毎年愛花」という題は自ら出題したもの。十歳で即位してから三十九年の在位期間を振り返って詠んだ天皇としての感慨である。江戸時代前期に強力なリーダーシップで宮廷歌会を導いた後水尾院の「ゆたかなる世の春は来ぬ花ならで大内山に何を待たまし」を踏まえ、三十九年間、すばらしいこの世の春をわがものとして宮中の花々を飽きることなく見てきたという充実した天皇時代がうかがえる。中宮は光格天皇の正妻で、後桃園天皇の皇女であった欣子内親王。寛政六（一七九四）年に入内して以来、光格天皇と同じ視点で宮中の桜を愛でてきた。

最後に光格天皇が十八歳の時に宮廷御会に詠出した題詠二首を紹介して稿を閉じた

天明八（一八一七）年十月二十四日

月次御会（組題百首。光格天皇の引いた題は柳と逢恋）

- ・柳 あさ風のくしけづるらしさほ姫のね
- くたれがみの青柳のいと
- ・逢恋 新まくらかはせるこよひもるとも
- におもはゆるながらちぎるむつごと